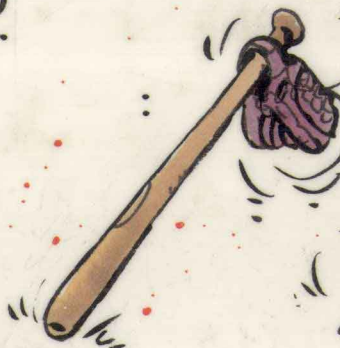


ちちお屋 パパヤ コオカシヤ

江藤初生・作
関口シュン・絵



ちちお屋 コオカンニヤ



江藤初生・作

関口シュン・絵

藤初生

九三二年、東京に生まれる。野間教育研究所助
。NHK『お母さんの勉強室』の司会を経験す
るなかで、子どもをめぐる文化に関心をよせるよ
うになる。おもな作品に『カラスになったぼく』が
ある。日本児童文学者協会会員。中部児童文学会
会員。

住所 愛知県名古屋市長区社口一の二〇二

上社北住宅二の六一九

関口シユン

一九五七年東京都に生まれる。東京工業大学付属
工業高等学校建築科を中退後、日本各地を放浪。
その後、漫画家永島慎二氏のアシスタントとなる。
独立後、コミック誌を中心に活躍。おもな作品に
『フットギア』（少年画報社）ほかがある。さし絵の
仕事に『海にしずんだ島』（福音館）がある。

住所 東京都練馬区上石神井四の三の四

ちちお屋パパイコオカシヤ

こみね創作児童文学・18

1988年10月30日 第1刷発行

著者／江藤初生

画家／関口シユン

発行者／小峰紀雄

発行所／小峰書店 東京都新宿区市谷台町4-11 ☎03-357-3521

振替・東京6-195544

本文組版／type & たいぽ 表紙印刷／斎藤印刷所

本文印刷／厚德社 製本／文勇堂製本工業

NDC913 ISBN4-338-05718-1

©1988 Printed in Japan

もくじ





ジン



メグ



たま
玉ヤス



ノラ

もくじ

ちちお屋のパパ

6

ぼくたちは青年実業家

42

ニセモノ “親子そろってクイズ”

67

もしもし、わるい子はいないかね

83

ジユウマンエン……!

112

よし
吉井のおばあちゃん

オサムさん



くわ
桑田



アリ平のばあさん



の
トチ野アリ平

パパやがのこした暗号

ちちお屋・パパや・コオカシヤ

ふたたびパパやを

161

148

128

ちちお屋のパパ



ジンの母



ジンの父

ちちお屋
パパパヤ
コオカンシヤ



ちちお屋のパパ

Ⅰ

「きのう、ジンの家にきたのは、父親なんだろう？」

「だから、ちちお屋なんだよ」

「あら、パパじゃないの……？」

「だからさあ、ちちお屋のパパなんだよ」

ぼくは、いいかげんいやになってきた。校門をでたところから説明しているのに、メグ、玉たまヤス、桑田くわたの三人は、てんでわからないって顔なのだ。

おまえたち、連休ばけじゃないか？　ぼくはもうすこしでいいそうになった。いけない、いけない。三人に助けをもとめているぼくだ。そんなこと、いえる立場じゃないのだ。

「スクランブル交差点こうさてんの信号が、三回目の青になった。みんなはそろそろわたっていく。ぼく

たちはまだ、信号の手前でかたまっていた。

「だけど、ほんとにちちお屋なんているかしら。テレビの見すぎで、ジンの頭、おかしくなったんじゃないの？」

メグが、ぼくにうたがいの目をむけた。

「そうだよ。ちちお屋に脅迫されるかもしれない、なんてさ」

玉ヤスがメグに調子を合わせた。

「推理ものか、刑事ものの主人公になったつもりでな」

桑田までぼくを裏切って、メグに同意した。

「ほら、ジンをさ、小さいときから、ごっこ遊びが好きだったでしょ」

ああ、もう、決定的だ。

ぼくの名前は松岡仁（十一才）。みんなからジンとよばれている。メグこと三宅恵とぼくは、ベビーカー時代からのつき合いだ。幼稚園もいっしょだった。いつでも、ぼくよりずっと背の低いメグが、ぼくよりずっと姉さんぶっていた。それどころか、ままごと遊びでは、メグはママ、ぼくは赤ちゃんだ。だからって、夢遊病あつかいされて、たまるか。

「ほんとに、ちちお屋がいたんだからな。ほんとに、ちちお屋のパパがぼくの家に来て、トランプしたり、オセロゲームしたりしたんだからな！」

ついにぼくは、大声をあげてしまった。

「じゃあ、証拠あるか？」

玉ヤスが、おつきな目玉をぐりぐりさせて、ぼくにせまってくる。

玉ヤスの本名は、玉木康隆。康隆は、徳川家康の康に、西郷隆盛の隆なんだそうだ。「そんな、殿様みたいな名前にはあわないよ」みんなの意見がいつちして、ぼくたちは、玉ヤスト、

したしみをこめてよんでいる。

「あるさ、きてみろよ！」

ぼくは、名譽にかけても証拠を見せなくてはならない。そのとき、信号が青になって、ぼくはまっさきにわたりだした。四人は足ばやにひまわり団地にむかう。この団地ができて十三年、立木が枝をのびし、新緑が初夏の太陽をあびてまぶしいほどだ。

2

「あいつの裏がわに、はってあったんだ」

ぼくが指さしたのは、芝生のすみに立っている、ライオンの形をしたバス停の標識だ。以前、ボウリング場のマイクロボスが、ひまな団地の奥さんたちを迎えにきていた。その後、パート

だ、カルチャーセンターだと、奥さんたちはいそがしくなって、送迎バスは廃止され、ライオンのすがた形をした標識だけが、団地の中にぽつんとのこされた。ライオンは、はげつちよろけになった今も、おどけた顔であいきようをふりまいている。

「なんにもないじゃないの！」

メグがライオンのまわりを一周した。

証拠がない……。ぼくはあわてた。

「あつたんだよ。『君ニカシマス……。ちちお屋』っていう、広告が」

「そんなもの、どこにもないじゃないか。おっこちでもないぞ」

玉ヤスがおおげさにあたりを見まわす。

「おかしいなあ。きのうは、たしかにここにはつてあつただけど。『ライオンボウルの裏、ちちお屋』って広告が……」

そもそも、ことのはじまりは、その紙を見つけたことだったんだから。

「あたし、生まれたときからここに住んでいるけど、そんなもの、見たことも聞いたこともないわよ」

「ぼくだって、はじめは信用しなかったさ。でも、ぼく、いつてみたんだ」

「どこにいったのよ？」

「だからさあ、この、ライオンボウルの裏だよ。裏に、プレハブの建物があつて……」

ぼくは、ライオンの頭をたたいた。

はげつちよろけのライオンが、申しわけなさそうな顔をしている。

「ちちお屋が、いや、パパがいたんだ。いや、ぼくが、パパを注文したんだ。中に父親がいっぱいいるみたいだったけど……」

「もお。はつきりしてよ！　ちちお屋とか父親とか、ジンのいつてること、さっぱりわかんないわつ」

メグが、じりじり足ふみしだした。

「じゃあ、その、ライオンボウルの裏の、ちちお屋とかまでいつてみようぜ。一目瞭然。百聞は一見に如かず、だよ」

ぼくたちのあいだで、学識経験者といわれている桑田だ。きょうもまた、テレビの教養番組とおなじく、さいごに登場してきて意見をまとめた。今のぼくには、からかわれているとは思えないけど。

「そうよ。そうしたら、はつきりするわ」

「このままじゃ、おれたちだって、安らかに眠れないよ」

「玉ヤス。おまえ、成仏するの、まだ、早いんじゃないの」



「安らかに眠る^{ねむ}って、死ぬことよ」

「夜、ぐっすりねることじゃないの？」

ハハハハ。メグに玉^{たま}ヤスに桑田^{くわた}はわらい声をあげたけど、ぼくはいっしょにわらえない。

子どもの日がすぎたというのに、アパートのベランダには、小さな鯉^{こい}のぼりがぶらさがっていた。

きのうとおんなじだよな。空が青くて、「五月晴^{さつきば}れっていうんだよ」と、ちちお屋のパパがおしえてくれたつけ。ぼくにも、ちちお屋とすごした半^{ゆめ}日が夢のように思える。夢ならいいんだけど、そうはいかないからこまっっているんじゃないか。

なにをはなしているのか、三人はまたわらい声をあげた。ひとごとみたいにわらっているけど、おまえたちにもすこしは関係があるんだからな。

3

関係があるなんていったら、ぼくの責任^{せきにん}のがれかもしれない。それは、連休前の五月二日、金曜日のことだった。あしたから三連休ということで、学校帰りの生徒たちは、みんなうきうきしていた。

桑田は、九州からでくる親戚しんせきの人を案内して、市内見物をするのだと、お城、テレビ塔とう、動物園など、観光地を指をおってかぞえあげていた。メグは、「ナオミおさんの結婚式けつこんしきだから、大阪に行くのよ。あなたたち、ホテルの結婚式にでたことある？」と、自分の結婚式みたいにはしゃいでいた。

「おれは、月曜日に、おやじの会社の連合運動会があるんだ。だからさあ、土曜日はママとシヨッピング、月曜日はトロフィーを手にした。パパと、レストランで乾杯かんぱいってことですよ」

玉ヤスは両手を広げ肩かたをすくめて、演技たっぷりでしゃべった。

「なんだよ。パパとかママとか、聞きなれないことばつかって、気取っちゃってー」

三人は、いっせいに玉ヤスにとびかかって、頭をぼかンぼかンぐった。玉ヤスは、

「ほんとだよ。ほんとだってば……」

頭をおさえて逃げまわった。

四人とも演技過剰かじよう。三連休にうかれて悪のりしていた。

「ジンは、なにするんだよお」

なぐられおわった玉ヤスが、頭をあげながら口をとがらせて、ぼくにきいた。

「ぼく……？」

ぼくの父さんは旅行社の添乗員てんじよういんだ。母さんはターミナルデパートにつとめている。ゴールド

ンウィークは、猫の手もかりたいほどのいそがしさだ。「一日ぐらいは、お休みとれそうよ」といつていた母さんも、いざとなったら「病人がでちゃってね、休めないわ」になってしまった。「いつだって、こうなんだから」ぼくは、ぶーっとふくれたけど、どうしようもなかった。「土曜日と日曜日は、野球を見て、月曜日は子どもの日 怪獣映画特集でも見るかな」

「じゃあ、家にいて、テレビばかりじゃないか」

「そうさ。ぼくは、おまえたちみたいに過保護児じゃないからな。パパやママにひつついてないんだ。おまえたち、ヨーチっばいぞ」

胸をそらせ、ぼくはりきんだ。

そういつたてまえ、連休の一日目と二日目は、テレビを見たり、マンガをよんだり、ポテトチップスをかじりながら家の中でごろごろしていた。さすがに三日目、子どもの日は外にとびだしてしまった。

団地の中庭には人影もなく、低空で旋回するセスナ機の音がのんびり聞こえていた。ベランダに、目ざしみたいな鯉のぼりがぶらさがっている。

「やい！ おまえたち。空をおよいでしろよ。アパートのかげでしゃべってないでさ」

ぼくはいつてやった。

ビイツ、ビイツ！